



韓国キリスト教会の中国人労働者に対する支援活動 ： 韓国の大郎・慶北地域にある教会の事例を中心に

具, 知瑛

(Citation)

社会学雑誌, 22:75-88

(Issue Date)

2005-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81011031>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011031>



韓国キリスト教会の中国人労働者に対する支援活動

——韓国の大邱・慶北地域にある教会の事例を中心に——

具 知瑛

神戸大学大学院文化科学研究科博士課程

はじめに

一九八七年から韓国社会に入り始めた外国人労働者の数は、二〇〇三年現在、三六万名に至るまで増加した。二〇〇一年末を基準にしてみると、三十三万名の外国人労働者のうち、六五％が未登録労働者、二六％が産業研修生、一％が研修就業者、五％が専門技術者である。つまり、これまでの韓国の外国人労働者のうち九五％が単純技能職に就いており、そのうち勤労基準法上（勤労者）の資格で認められる研修就業者は一％に過ぎなかったこととなる（ソルドンフン、2004）。

産業技術研修生は、実質的な意味で勤労者であるにもかかわらず、労働法上では勤労者としての保護を全く受けられない。また未登録労働者は絶えず強制送還される恐れのある社会的に弱い立場であるので、不利な処遇にも甘んじざるをえない。外国人は韓国社会の安全な成員でないまま、社会的権利

や義務から排除されている存在であり、また国家からの支援が全くない状態に置かれていた。しかしながら、これまでの賃金未払い、労働災害、暴行といった労働上の問題は、多様な目的で組織された民間レベルの支援団体を通じて解決されてきた。

労働力の移動とその定着はグローバル時代における世界共通の流れであるが、その様相は送る側と受け入れる側の社会・文化的な背景によって異なる。韓国社会の場合、外国人労働者に対する支援活動が宗教団体（特にキリスト教）と結びついている傾向がよく見られる^①。本稿では、中国宣教を目標として中国人の支援活動を行っている二つのプロテスタント団体の事例を取り上げ、団体の組織化過程、活動様相、活動の変遷を考察する。

この事例を通じて、次の二つの点が明らかに becoming はないか。まず、韓国社会のいかなる要素が、支援団体を組織させ、いかなる過程で活動が続けられるのか。要

するに、外国人労働者に対する国家レベルの支援のない韓国社会において、どのような社会領域がその穴を埋めているのかの問題である。次に中国への宣教という宗教的目標が外国人支援という過程にどのような影響を与えているのか。つまり、支援と宣教の関連性が見えてくるのではないか。先行研究において支援活動は、「労働問題の発生」や「不合理な状況による社会的不満の広がり」などを解決する側面に焦点を当てられてきた。しかし、ここでの支援とは、外国人の日常生活における経済的・情緒的支援であり、そのため単発的ではない持続的人間関係に基づくものである。

一 韓国キリスト教の特徴とそれに伴う分析枠組

韓国近代史においてキリスト教会の活動は、真に社会問題の解決を目指すものであった。特に一九世紀終盤に朝鮮半島へ入ったプロテスタント教会は、一般人への直接的宣教を禁じる政府との摩擦を避けるため、社会福祉という間接的方法をとり、朝鮮半島に定着した(太田、2003)。植民地期間においては反日運動、朝鮮戦争が終わってからは反共勢力、そして軍事政権時代においては民主化運動の求心点になっていた。あるいは、経済成長につれて都市への移動が激しくなり、新たに都市へ流入し

てきた人々のコミュニティ・センタ的な役割も果たしていた(秀村、2002)。要するに、韓国キリスト教会はもっぱら社会の身近にあり、社会運動の側面からみれば旗振りの存在であった。その要因としては、聖書といった精神的な求心点、すでに出来上った社会的ネットワーク、聖職者を中心としたフルタイム活動家、資金や空間の確保、そして宗教という非政治的な立場などが挙げられる。言い換えれば、韓国キリスト教会は、社会運動にあたっての動員可能な資源を多く有していたともいえる。

ここで韓国キリスト教会の社会的活躍を論じる際、「活動を可能にする資源」という概念の重要さが現れてくる。本稿では、韓国キリスト教会の外国人労働者に対する支援活動を紹介するにあたって、運動を成り立たせる資源の量やネットワークに注目した、資源動員論を分析枠組みとして取り上げたい。資源動員論は本稿の分析において次の三点で重要な意味をもつ。

〔1〕「運動はいかにして成功するのか」、若しくは「運動はいかにして続けられるのか」という問題を、組織に焦点を合わせて分析する中範囲の分析枠組みであること。さらに資源動員論のなかでも、運動への参加動機として不満という心理的要因を考慮に入れた、片桐の「二段階理論」を中心に据える。「二段階理論」とは、まず第

一に運動生成動機として、心理的要因を取り入れる。たとえば資源やネットワークを多く持っている人でも、不満がなければ運動に参加することはないという。そして、第二の段階として、運動過程における資源やネットワークの動きを通じて、組織活動を分析する（片桐、1996）。このような片桐の「二段階理論」は、宣教団体の活動が「成り立ってから続けていく過程」を考察するのに、重要な視点を与える。

〔2〕個人の経済的・合理的選択を前提にすること。本稿の事例となる宣教団体は公式化のレベルが低い。ここで公式化とは、ある特定の行動予期（期待）、つまり特定の役割を成員資格と結びつけることである。成員であることの条件として特定の役割を承認していることが求められ、承認する限りで与えられる報酬も獲得可能になる。成員資格と結合された特定の役割を成員役割とする。公式化というのは、この成員役割が制度化されている程度である（荻野、1995）。公式化のレベルの低い宣教団体は、言語化、定式化されていない非象徴的相互行為、とくに人格的信頼関係に依存されざるをえない。このような人格的信頼関係は中心人物（団体のリーダー）の活動ややり方に大きく依存する。資源動員論はこのような個人の役割を分析の前提としている。

〔3〕資源動員の仕方によって活動の方向性も大きい影

響を受けるということ。例えば、労働組合のように直接行動する構成員が多数存在する場合には、デモやストが有効な戦略になる。しかし、アルカイダのような組織の場合、構成員も支持者も少ないが、多大なコストを払う多数の構成員が存在するので、そうした資源を使った結果が自らの命を巻き込んだテロになる（樋口、2004）。外国人に対する教会の活動も同様で、動員可能な資源によって、その活動様相は諸々である。また、本稿の事例のように宣教という同様の目標を持っていても、資源によって活動の方向性が異なる。さらに、同じ団体においても、動員可能な資源が変わることによって活動も変わる。

二 団体概要と調査内容

二―一 団体概要

まず、団体AとB教会の共通点からみると、両方とも外国人労働者の需要のある3K工場が集中している工場団地に位置しており、外国人労働者に対する支援団体の活動が一番活発であった一九九〇年代前半に組織された。中国宣教を目標として、中国人の日常生活を支える活動を行っている〔表2参照〕。団体AとB教会の相違点とは、まず団体AはA教会に所属しており、中国人の参加資格を制限していない。一方で、B教会は独立した中国人教

会であり、不法滞在者や朝鮮族を断っている。〔三―二組織構成参照〕。

二―二 調査内容

調査は二回に分けて行った。一九九九年八月から二〇〇〇年一月までの一次調査では、団体Aの日曜礼拝や火曜聖書勉強の集いを参与観察し、中国人の調査に関しては主に朝鮮族の日常生活（職場、工場、宴会など）を観察しながら、聞き取り調査を行った。二〇〇一年三月から九月までの二次調査では、B教会の礼拝や集いを参与観察し、漢族の聞き取り調査を行った。そして、二〇〇三年八月と二〇〇四年七月に補充調査として、朴伝道師や金牧師に活動の変化を聞いた。

三 組織化

三―一 組織化過程

団体AとB教会の活動家は、宣教団体を組織する以前には外国人労働者の支援のような社会運動には全く携わっていなかったといっても過言ではない。では、いかなる原因が絡み合うことによって、宣教団体は組織化されたのか。本稿では次のような原因を取り上げて、宣教団体の組織過程を明らかにしたい。

表2 団体概要

	団体A	B教会
設立年度	1995年	1993年
地理的位置	ソンソ工場団地内部	シルヤン工場団地の周辺
活動家数	約15人(日常的参加者)	約 3~4人(日常的参加者)
代表者	朴伝道師(51歳、女性)	金牧師(43歳、男性)
専従幹部	3人(通訳者一有給、料理担当者、稱揚担当者)	なし
定期的活動家	12人(聖書勉強チーム担当者、料理・車支援者)	2人(他教会所属の宣教師準備者)
非定期的活動家	未定(活動家や幹部ネットワークでの訪問する)	4~5人程度(月1回程度訪問する)
組織の外部支援者	A教会の本部	未定(個人口座献金、物的支援品、支援金を提供)
中国人参加者	約114人(在籍者数)	約200人(在籍者数)
漢族	約78人	約200人
朝鮮族	約36人**	1人***
実質的参加者	日:約 50人 火:約30人	日・木:約70人
年間予算	1千2百万ウォン	未定
予算獲得方法	A教会の本部からの支援	個人口座献金、他教会の宣教献金、非定期的支援
団体形式	A教会に所属	中国人教会
週単位活動	日:午前10時半~12時(大礼拝一韓国人と一緒に) 午後1時~3時(医療・美容・韓国語の教室など) 火:午後6時~9時(聖書勉強会) 木:専従幹部の工場訪問	日:午後5時~10時(大礼拝) 水:宿舍礼拝(中国人の自治的礼拝) 木:午後5時~9時(聖書勉強と小礼拝)
年単位活動	正月、お盆、夏休暇のイベント(旅行、登山、バカンス) 短期宣教 発送式(中国人の夜)―中国宣教師の発送の意味	他教会のイベントに参加させてもらう。 発送式―中国宣教師の発送の意味
福祉支援	医療・美容・韓国語の教室など 中国料理、日用品などのプレゼントの提供 「旅人の夢」という月間情報誌の発行 24時間の救急電話の運営(朴伝道師の携帯電話)	問題に応じて対処(医療・美容サービス) 中国料理、日用品などの提供

* 2000年、調査当時

** 朝鮮族の場合、一人が何箇所の教会に重複して登録することが多いので、参加者と登録者数の差が大きいのである。

***T社の通訳者であったが(1998年~1999年)、B教会で出会った中国宣教を準備している神学大学生と結婚し韓国で生活している。

三——外国人労働者問題に対する社会的認識の高まりと教会内部の要請

個人が活動を始めようとする動機を持っていても、社会的環境に支えられなくては組織化ができない。どのような社会的状況で組織化が可能になったのか。ここでは、外国人労働者の問題に対する社会的認識の高まりや教会内部の要請が挙げられる。

韓国政府は労働力の輸入に伴う社会的費用を最低限に抑えるため、外国人労働者の存在を法律上では禁止しながら、実際には黙認するという矛盾した政策を行っていた。そして、外国人労働者の輸入から管理までを企業に任せていた。矛盾した外国人労働政策によって外国人労働者は賃金未払い、労働災害、暴行のような被害にも法的に無力な立場に置かれた（イウクジョン、1994:13）。しかし、このような矛盾した社会的状況が外国人労働者と韓国社会との緊張を高め、一九九四年の中国朝鮮族の自殺事件を始め、いくつかの外国人労働者のデモが行われた。さらに、それが放送されることによって社会的に注目を浴びることになった。それ以降、社会運動団体が外国人支援運動を行い、外国人労働者の人権侵害に対する社会的認識を高めようとした。このような運動団体の活動やマスメディアを通じて、外国人労働者支援の必要性が一般的に知られるようになってきた。

ところで、外国人労働者の支援に対する社会的認識の高まりにもかかわらず、団体AとB教会は社会的役割に関心を向けなかった。支援活動を可能にさせたもう一つの原因として、韓国キリスト教会の社会的停滞と中国人労働者への宣教の要請が挙げられる。順調に信者数を伸ばしてきたキリスト教は、経済水準が上昇した一九八〇年代になってから、その信者数の伸びを急速に鈍化させていた。そのため、主に自分の教会を持たない若い牧師たちは、海外宣教を目指す傾向が強くなりつつある。現在、韓国が送り出している宣教師の数は世界三位である（秀村、2003）。さらに、中国は人口や規模の面で、〈無限の可能性の国〉（キムヨンソク、1994:41）であり、一九九二年の国交樹立以降、韓国キリスト教会は多様なルートで宣教師を派遣してきた。しかし、中国においては国内の宣教活動が禁止されており、宣教師が自由に活動することが困難である。一九九四年からの韓国にある神学大学から発表された幾つかの論文は、中国宣教の必要性とその方法として韓国にきている中国人労働者への布教を論じている。（キムヨンソク、一九九四・金ヒョグチュール、一九九六・金ソンク、1998）このような社会的認識の拡散と教会内部の要請は、宗教家の活動と共に宣教師団体の組織化に重要な要因になっていた。

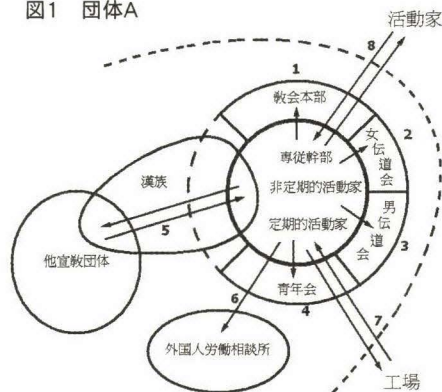
三——地理的要因と宗教家の個人動機

団体AとB教会は工場団地に位置している。そのため、一九九二〜四年の間、教会の周辺で外国人労働者がよく見かけられたという。朴伝道師(団体Aの代表)は一九九四年の春、バス停で中国人女性から道を聞かれ、中国人の存在に気付くようになる。その後、かれらの工場を訪問して教会へ招待した。B教会も同様で、一九九二年金牧師が教会の周辺でT工場の漢族と出会い教会に招待したが、最初のキツカケであった。

ところで、このような出会いはきっかけにはなりうるのであるが、それが必ずしも組織化へと繋がるわけではない。出会いが組織化に至るには、担当者である宗教家の努力が必要であった。宗教家はなぜ支援活動に参加するようになったのか。ここで、宗教家の社会的立場と関わっている心理的要因が挙げられる。活動のリーダーである朴伝道師と金牧師の共通点とは教会内部における発言力や立場の低さである。朴伝道師は女性らしくない外見、小学校卒、未婚女性、無職、出身地の違いなどの点において、A教会での立場は低かった。³⁾彼女の唯一の自慢は、強い信仰心である。宣教団体を組織していた当初は、A教会本部から宣教組織として認めてもらえなかった。朴伝道師の努力によって中国人数が増加し、二回の行事(「中国人の夜」という)を行ってから、教会の本部は彼女らの活動を宣教組織として認め、予算を策定し、

活動空間や朴伝道師の活動費を提供した。二〇〇一年には中国宣教活動のための、朴伝道師の専用車まで出された。一方でB教会は、中国人教会となる一九九二年以前には韓国人の信者も殆どいなかった。それは、畑と道路に接している地理的悪条件、収容人数の少ない小規模空間、そして隣に大きい教会があることなどが原因であったと言われている。調査当時も韓国人の信者は非定期的に参加する他教会所属のボランティアしかいなかった。中国人教会と

図1 団体A



1. 活動環境の提供(経済的支援・活動空間)
2. 火曜聖書勉強会の際の食事の用意(定期的活動家)
3. 車の支援
4. 定期的活動家、年間行事の際の非定期的活動家
5. 競争:限られた数の漢族を獲得するため
協働:限られた団体の金銭的・人的資源のため年間行事・医療サービスなどで協働
6. 工場との間に労働災害問題などが生じた際、その解決を依頼
7. 活動家:関係が悪化しないように注意しながら活動、工場:通訳者のいない小規模工場は教会に通訳を依頼
8. 中国宣教を準備している人や中国語を勉強している他教会の大学生が教会で漢族との出会いを求め、教会は活動家を求める。この場合の活動家はA教会に移ることが多く見られた。

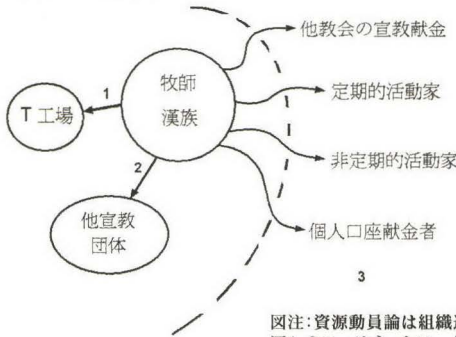
して有名になってからは、個人口座献金、他教会の宣教献金、非定期的な物的支援で運営するようになった。B教会は大邱・慶北地域において、中国宣教会としてかなり知られている。

三―二 組織構成

資源動員ネットワークを中心とする組織構造において、団体AとB教会の相違点が現れてくる。団体Aは、A教会に所属しており、経済的資源や人的資源を教会内部から動員できる。しかし、教会に登録している漢族や朝鮮族のなかには、他教

1. 大多数の漢族がT工場に所属しているので、T工場との関係が悪化しないように注意しながら活動。
2. 協働：家族の人間関係、孤立した地理的条件のため、比較的に漢族構成員が安定している。よって他宣教には限られた教会の資源で難しい行事に参加してもらう。
3. 外部で経済的支援と活動家を獲得しなければならない。

図2 B教会



図注：資源動員論は組織運営に対する個人の戦略的動員に焦点を合わせる。
図1, 2の→はネットワークのなか、何かを求めている人が主体になっている。

会に二重登録している人も多く、中国人との関係は比較的不安定である〔図1参照〕。一方で、B教会は経済的・人的資源を、牧師の個人的ネットワーク、若しくは中国宣教に興味を持っている人などから個別に動員しなければならぬ。しかし、参加している漢族は殆どT工場の所属であり、T工場の孤立した地理的条件などで移動が自由ではないので、二重登録は一人もいなかった。要するに、B教会は一定の成果をあげつつも、安定的な外部支援と活動家の確保ができない不安定な状態に置かれている〔図2参照〕。

このような組織構造の違いによって、資源動員の仕方や活動の方向性は異なる。団体Aは中国人の参加人数を重視しており、不法滞在者でも朝鮮族でもたくさんの方が参加するのを望んでいる。しかし、活動家の確保が比較的安易であるため中国人に対する活動プログラムは多彩である。一方、B教会は、活動の成果によって外部の支援が流動的に変わるもので、外部支援者から問題と思われるような要因は最初から徹底的に排除していた。例えば、金牧師は不法滞在者や朝鮮族の参加を断っており、漢族のなかでも教会の話に素直に応じってくれる女性が殆どである。正式化されたプログラムは少なく、礼拝や聖書勉強の際、もっぱら重要なのは牧師の説教である。しかし、それにもかかわらず、B教会においては中国人と牧

師との強い信頼関係が伺えた。B教会は成員役割に関する共有度が団体Aより高いのである。さらに、団体Aは限られた漢族数のなかで他教会と競争関係にあるのに対して、B教会は宣教献金の支援や行事に参加させてもらうなど、協働関係を求める傾向が強い。以上のように朴伝道師と金牧師は中国人労働者に対する支援活動を行っているものの、労働災害、賃金未払いなどの事情で外国人労働者と雇用主との間に問題が生じる際には、深く関わらないようにする。その理由とは雇用主との関係が悪化すると、雇用主は労働者が教会に行くのを禁じるかもしれないし、そうなると中国宣教活動が難しくなるからであるという。

四 活動

宣教団体が持つ意味は人によって異なるが、次のようにまとめられよう。定期的・非定期的活動家にとって、支援活動の意味は中国への宣教という目標と共に、社会的弱者である労働者を救うという宗教的実践、中国語の勉強、中国宣教の準備に対する個人的訓練、そして単なる余暇の過ごしなど、多様であった。また、中国人労働者のなかでも漢族の場合、交際・余暇を過ごす場、経済的・文化的支援がもらえる場として活用されていた。朝

鮮族の場合は、韓国社会に関する情報交流の場、また普段は会えない社会的レベルが高い韓国人との出会いの場としての意味が伺えた。しかし、前述したようにこの団体においては、リーダーである金牧師と朴伝道師の存在が大きく、この二人は以上の人々の団体に関する異なる意味を自分の目標に合わせようとしていた。本章では以上の人々を資源として動員しながら、目標を達成していくリーダーの活動を考察する。金牧師と朴伝道師には、組織運営と中国宣教という二つの目標がある。かれらは自ら基盤になる資源を持っていないため、経済的支援者や活動家との関係形成を求めている。そのためには、中国宣教への可能性を示し、そして実際の成果をあげなければならぬ。

四—一 外部支援や活動家獲得のための基準・エスニシティ

中国宣教の成果をあげるとは、外部支援の拡大と活動家の確保に繋がる。従って、何が中国宣教の証拠になりうるのかが重要な問題点になる。可視的な証拠とは中国人の参加者数であり、さらには現在の活動が中国宣教へ連結されうる可能性であろう。

ここで漢族を優先するエスニシティという基準が現れ

てくる。この基準は次のような言葉からも伺える。”朝鮮族は信じられません。教会が言っていることにちゃんと応じてくれないし、自分の目的を達成すると逃げます”、“漢族は何かをもらったら、裏切りません”、“不法労働者は断っています。だから、朝鮮族は一人もいません”。“漢族が優先されるのはまず、漢族と朝鮮族の韓国における生活の違い〔表3参照〕から考えなければならぬ。その理由として、次の五つの要因が取り上げられる。(1)漢族は朝鮮族より生活の幅が狭いため、朝鮮族に比べて教会への出席率が高い。(2)前述のように朝鮮族と漢族が教会に求めるものがことなる。漢族は楽しい余暇生活や諸々の支援を求めているので、教会のプログラムや話にちゃんと応じる。一方で朝鮮族は”普段の生活場では出会うチャンスのないレベルの高い韓国人”との人間関係を求めている。言い換えれば、朝鮮族は同等な立場で人間関係を結びたいので、教会からの支援を受けるのは恥だと思っており、それは活動家から見れば、かれらの活動にちゃんと応じてくれないことになる。(3)定期的活動家は中国語の学習や中国宣教を準備している人が多く、より多くの漢族はより多くの活動家を呼び寄せる。(4)中国本土への宣教の拡張という目標は、中国で多数民族である漢族を優先させる。(5)不法滞在者として五年以上韓国に在留する朝鮮族に比べて、漢族は最長二年間の研修期

表3 韓国における漢族と朝鮮族の生活

	漢族(男性)	漢族(女性)	朝鮮族(男性)	朝鮮族(女性)
調査対象者数	13人	22人	20人	10人
産業技術研修生	11人	17人	1人	4人
未登録労働者	2人	5人	19人	6人
平均年齢	20代後半～30代前半	20代	20代～50代まで多様	30代～50代
平均学歴	高卒 (大卒2人)	小・中卒(高卒4人)	中・高卒(大卒1人)	高卒(専門学校2人)
職種	繊維・染色業	繊維・染色・紡織業	工場、建設業、食堂など多様	食堂などサービス業
労働時間	8時間と残業	3交代	工場(平均6時間と残業)建設業(雨の日が休み)**	月2回休み
居住形態	宿舍	宿舍	工場(宿舍・友人と同居)、建設業(作業チームで同居)	食堂に部屋など友人と同居
賃金	月 60万～70万ウォン	月 40万ウォン	工場 月80万ウォン～110万ウォン 建設業 一日 5万ウォン～8万ウォン	工場 月60万ウォン 食堂 月80万ウォン
余暇生活	近所の友人に会う。 テレビを見る。 教会へ行く。	宿舍の同僚と過ごす テレビを見る。 教会へ行く。	飲み会、買い物、賭博、カラオケ、旅行など韓国人とあまり変わらないという。	友達に会う 買い物、カラオケ、旅行など

表注* インタビュー対象者に限られたデータである。

** 仕事の熟練度や個人ネットワークによって異なる。原則的には雨の日が休みになるのであるが、仕事のない人は月10日間も仕事がないこともある。仕事がない場合は、地域を移動した

間が終えると帰国するので、短期間で中国宣教の成果が出ると思われる。このような理由から、活動家にとって、漢族の参加は外部支援と活動家を獲得するのに重要な資源になる。

四―二― 漢族の動員のための戦略的活動

資源動員論において構成員を獲得する際には、まず関心のない人に自分たちの目標を支持してもらうこと（合意の動員）、後から実際に貢献してもらうこと（行為の動員）を望んでいる（樋口、2004）。しかし、宣教団体の場合、宗教的な同意が最終的目標なので一般の社会運動団体とは逆順の動員が必要になる。まず、教会の礼拝や集いに参加してもらうこと（行為の動員）、次に教会の話に同意してもらうこと（合意の動員）を求めている。ここでは行為の動員と合意の動員のための、団体の戦略的活動を紹介したい。

四―二― 行為の動員

漢族が団体に参加するきっかけは、漢族の自発的意思ではなく中国宣教を目指す宗教家の積極的な活動である。朴伝道師や金牧師は、近所の工場にプレゼントなどを持って訪問し、教会に来ることを勧誘する。このような個

別訪問は漢族に教会が自分のための場所であると感じさせる。そして、礼拝や集いの時間に合わせて工場まで車で迎えに行く。団体Aの場合は、火曜聖書勉強チームを中心として、活動家が電話で生活の状況を聞くようにしている。朴伝道師は自分の携帯電話番号を情報誌に載せ、何か急用がある場合二四時間体制で手伝っている。さらに、諸々の支援活動〔表2参照〕や中国人同士の交流の場の提供は、より多くの中国人を呼び寄せる。B教会の場合、定期的活動家が少ないため、牧師は漢族が自ら管理するシステムを作っている。水曜宿舍礼拝チームのリーダーである漢族が、他のメンバーを管理し礼拝に参加させるようにしている。金牧師は礼拝を行う際に、毎回出席を取り、欠席の多い漢族とは個人面談するなど、出席させるのに力を注いでいる。金牧師と朴伝道師はこのように出席してもらうことが、組織の目標に対する情緒的共感、即ち最終的目標である合意の動員にも繋がると思っている。

四―二― 合意の動員

宣教団体の最終的な目標とは「合意の動員」である。年間行事のハイライトとは信仰告白（干證ガンジュン）であり、基本的には中国人が自ら語ることになっている。このような信仰告白は支援家に対して中国宣教の成果を示すのに一番効果があるという。この合意の動員は活動

家にとっては一歩難しいことでもある。活動家は中国人に合わせる戦略的な聖書伝達⁵⁾、教会空間の使用、祈祷、歌、身振りなどを、教会に来る中国人に繰り返し教育する。中国人は団体に参加する成員役割として、宗教家が要求する〈態度〉に承認しなければならない。朴伝道師は毎週、祈祷のタイトルをつけて祈祷をさせ、金牧師は支援者が訪れた際に中国人に代表祈祷をさせる。二年間の韓国での生活を終え、帰国する際には韓国から中国で宣教師を送るという意味の発送式が行われる。なかには“自分は信者であり、中国に戻ってから教会からの使命を果たす”という人もいる。このような行事は参加する宗教家に感動を与え、宣教団体への支援の必要性に同意させる。しかし、活動家や支援家はこのような合意の動員を完全に信者になった証拠と認識するのであるが、実際の漢族の話を聞くと単なる情緒的紐帯や感情的承認に留まっている場合が多い。

五 変化―帰国者の動員に伴う中国への活動の拡張

本章では、動員可能な資源の変化に伴う活動の変化に関して述べる。金牧師や朴伝道師は組織のなかでの行為の動員や合意の動員を超えて、当時動員可能な資源を

使い中国宣教という期待に満足させるように、その期待を定式化し確定する必要性を感じていた。そのような文脈での活動の変化として、まず、増加した帰国者の動員に伴う中国への活動の拡張が取り上げられる。団体Aの活動家は教会の漢族が帰国する際に同行し、そのなかで自ら信者と認めた人の村を中心に宣教活動を行う。朴伝道師は年二―三回程度、その村を訪問し家庭で礼拝を行っている人や信者であるという人に経済的・宗教的支援を与える。夏には「短期宣教の旅」というタイトルで団体を組んで一週間くらい村を訪問し、医療・美容サービスをを行う。B教会はこうした中国での活動により力を注いでいる。牧師は月に十日間は中国に滞在しながら、帰国して活動している人の活動を支え、月七万ウォンの支援金をあげていた。二〇〇〇年現在、そのような支援金をもらっている人が二三人、それに関して話す際に宗教家は、「二三箇所の子教会ができた」という言い方をする。

さらに、牧師は自分が中国に行く際に、教会の外部支援者たちを同行させて、教会の活躍を見せ、より多い支援を引き出している。B教会には、韓国に来る以前に中国の村で金牧師と出会い、労働者として韓国に来てから教会に通うのは当然だと思ったという人もいる。

もう一つの変化として、団体Aの事例が挙げられる。朴伝道師は不法労働者になってからもまじめに団体Aに

通っていた漢族のなか、何人かに仕事を辞めて、二年過程の宣教学校に入学することを勧誘していた。学費は教会が援助できるようにして、生活費は教会内の個人支援者を探すという。この事例も中国宣教という期待を定式化しようとする活動の変化の証拠であるといえよう。

おわりに

以上、資源動員論をもとに、宗教家の個人的動機で始まった活動が、社会的・宗教的要請によって組織化され、動員可能な資源やネットワークを用いて持続・拡大されていく過程を考察してきた。本研究を通じて、先行研究が見落としてきた次の問題点が明らかになったのではない。まず、以上のように宣教の目標が団体活動に強い影響を与えているものの、先行研究においては、同じような団体を取り上げても、支援活動の側面からしか考察しなかった。支援活動を行っているキリスト教会団体のうち、八四三%が宗教教育を行い、その形態は礼拝（八七・二%）だけではなく、本稿の事例のように信仰相談（七五・七%）、聖書勉強（六一・七%）まで行っている。このような宗教的目標による支援は、日常的信頼関係の形成を重視するので、「問題の解決」という一般的に取られている支援とは相違点がある。さらに、宣教という目標

は一般の支援団体が担っている社会的役割には関心を向けないようにする。

また、本稿は外国人労働者に対する国家レベルの支援が殆どない韓国社会において、そのような空白のパートを埋めている団体の活動のミクロな分析である。ここでミクロな分析が持つ意義とは、社会運動的目標を目指さない、宗教的理由で活動をする事例のような団体が存在するからこそ、外国人労働者に対する日常的な支援活動まで可能になることが伺えるのである。要するに、それが宣教団体の潜在的機能である。最後に、今後の課題として述べておきたいことは、二〇〇四年八月の雇用許可制の実施に伴う支援活動の変化である。雇用許可制の実施は外国人労働者に対する国家レベルの支援が開始することとも関連している。国家は支援活動を行う際に、既存団体をネットワーク化し活用すべきであるという議論が活発になされている。従ってこのような団体のミクロな研究は、団体のネットワーク化の方向性を検討する際にも援用できよう。さらに、これから国家の介入による資源の変化が活動に影響も重要な課題として残っている。

(1)

表-1

宣教団体の性格	団体数(個)	比率(%)	宣教団体の性格	団体数(個)	比率(%)
市民運動団体	8	5.0	仏教	4	2.5
労働運動団体	3	1.9	イスラム	7	4.4
宗教団体	137	86.2	他の宗教	15	9.4
カトリック	12	7.5	医療団体	8	5.0
プロテスタント	99	62.2	法律サービス団体	3	1.9
			総	159	100.0

票注*朴チヨンウン(2003)から引用。
2003年10月現在、外国人宣教団体の159箇所の性格を提示する。
*プロテスタントには7つの派に分けて説明してあったが、ここではプロテスタントで統一する。

(2) 1994年1月産業災害でも治療や被害補償をもらえなかった未登録労働者による経済正義市民連合の講堂でのデモを初めに、1995年1月にはネパール人産業技術研修生、13人が韓国人管理者や人力送業者による諸々の人権侵害に抗するデモが行われ社会的衝撃を及ぼした。

(3) 宣教組織として認めてもらえなかった理由について次のように述べていた。私が大邱の出身じゃないから、教会でいじめられた。宣教師はみんな英語圏で留学していた優秀な人で、教会ではその人たちの力が強い。牧師様は保守的で、女性の伝道師はスカートをはかないといけないと言うの。それで、私はどうしてもスカートがだめだから、勝負しようと思って牧師様のところに行ったの。スカートはかないといけないなら、私は辞めますって言った。それだけ譲ってもらった。

(4) カンシユンとはキリスト教において、自分の宗教上の体験を告白することによって、神様の存在を証言することである。

参考文献

秀村研二、二〇〇二、「フィールドとしてのキリスト教・教会」
『韓国朝鮮の文化と社会』韓国・朝鮮文化研究会風響社一、二九―四五。

樋口直人、二〇〇四、「国際NGOの組織戦略―資源動員と支持者の獲得―大畑裕嗣他編『社会運動の社会学』有斐閣選書

イウクジョン、一九九四、「国内バングラディッシュ労働者の生活実態と適応戦略に関する事例研究」ソウル大学大学院。

片桐新自、一九八二、「組織関連視覚からの地域政治のアプローチ」『社会学評論』三三、六三―七九。
一九九六、『社会運動の中範囲理論、資源動員論からの展開』東京大学出版会。

キムヨンソク、一九九四、「国内外国人産業勤労者に関する韓国教会

(5)

表4. 説教などの教会内の話から伺える聖書伝達の戦略的な側面

宗教家の中国人に対する認識	聖書伝達の様相
一番大事なのは金である。	祈祷を通じて現実的問題の解決ができる。 お金を稼ぐためには、祈祷しなければならない
貧しい国から来た。	先進国はみんなキリスト教の国だ。
韓国すると中国の宣教師になる。	キリスト教の実践の完成は犠牲である。
共産主義の思想が強い影響を与えている。	世の中は神様が創造した。

の宣教戦略…産業研修生と不法滞在者を中心として」
ゴシン大学神学大学院。

似田貝香門編、一九八六、『社会運動』 東京大学出版会。
荻野達史、一九九五、「社会運動論における組織的秩序問

題—運動組織観の見直しにともなう問題点の検討」

『社会学論考』一六、一—二六。

——一九九八、「集合行動フレームの動員潜在力分析」、
『社会学評論』四九、三六—四九。

大畑裕嗣編、二〇〇四、『社会運動の社会学』 有斐閣。

太田心平、二〇〇三、「韓国キリスト教労働運動の多面性」

『韓国朝鮮の文化と社会』 韓国・朝鮮文化研究会 風

響社二〇二九—一六八。

坂本真司 二〇〇一、「NGO民衆エンパワメント戦略
の新しい視覚」『社会学評論』五一、一三八—一五四。

塩原勉編、一九八九、『資源動員と組織戦略—運動論の新
パラダイム』 新曜社。

ソルドンフン、二〇〇三、『外国人労働者実態及び支援サ
ービス需要調査』 韓国労働財団。

樽本英樹、二〇〇一、「国際移民時代における市民権の問
題」『社会学評論』五一、四—一七。

柳東植、一九八七、『韓国のキリスト教』東京大学出版会。